

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	中村 匡孝
論文担当者	主査 舟木 壮一郎
	副査 大島 健司
	副査 蓮池 由起子
学位論文名	Risk Factors for Distant Metastasis in Papillary Thyroid Carcinoma: Association with Lateral Lymph Node Metastasis (甲状腺乳頭癌における遠隔転移のリスク因子：外側区域リンパ節転移との関連)
<p style="text-align: center;">論文審査の結果の要旨</p> <p>目的 学位申請者は甲状腺乳頭癌における遠隔転移のリスク因子を明らかにし、特に外側区域リンパ節転移と遠隔転移との関連性を検討することを目的とした。</p> <p>方法 兵庫医科大学および四国がんセンターで手術を受けた537例のうち、リンパ節転移を有する283例を対象とした。中央区域リンパ節転移 (N1a) 群164例と、外側区域リンパ節転移 (N1b) 群119例に分類し、後方視的に検討を行った。遠隔転移に関連するリスク因子について解析を行った。</p> <p>結果 遠隔転移の発生率は、N1b群で20.0% (24/119例)、N1a群で4.0% (7/164例) と、N1b群において有意に高かった ($p < 0.001$)。多変量解析の結果、年齢55歳以上 ($p = 0.011$)、腫瘍サイズ4cm超 ($p = 0.034$)、レベルII+Vへのリンパ節転移 ($p = 0.034$) が遠隔転移のリスク因子として有意に関連していた。また、N1b群の70.7%がリンパ節節外浸潤を伴っていた。</p> <p>考察 外側区域リンパ節転移のうち、特にレベルII、Vへの転移が遠隔転移の高リスク因子であることが示された。N1b群の70.7%がリンパ節節外浸潤を伴っており、N1bは節外浸潤と同様の臨床的意義を有し、高リスク因子となる可能性があることが示唆された。本研究の結果から、レベルII、Vへの転移がある場合にはより積極的な治療介入が必要であると考えられた。治療方針として、N1b特にレベルII、Vへの転移がある場合、甲状腺全摘術+側頸部郭清術を推奨し、術後の放射性ヨウ素治療を積極的に検討すべきとの考察している。</p> <p>結論 本研究では、甲状腺乳頭癌における遠隔転移のリスク因子として、年齢55歳以上、腫瘍径4cm超、外側区域リンパ節転移 (特にレベルII、V) が有意に関連していたことを示していた。本結果は、今後の治療戦略において重要な指標となると考えている。</p> <p>本研究は甲状腺乳頭癌における遠隔転移のリスク因子を明らかにした重要な研究成果を示しており学位授与に値すると判断いたしました。</p>	